

【山本忠義さん 簀桁製作】(土佐市)

(全国手漉和紙用具製作技術保存会)

土佐のみならず全国の産地に簀桁を供給する道具職人の山本さんは88歳。2代目で、父はいの町の出身。「戦前も戦後も、吉井源太が改良した大きい桁は県外へ出て行きました。簀桁の技術は、元は伊野から。セオリードおりに簀桁を作らないと紙は漉けません。紙のサイズによって、桁のそり具合が違う、これも源太が見つけて伝承したんです。」土佐和紙の地元で全国の注文に応じてきた道具職人だからこそ、源太が残した仕事が、はっきり見えている。



※吉井源太は桁の棧に銅線を引き、棧に簀が当たらないようにして、紙の厚さが均一に漉ける「針金引き」の桁を改良し、普及させた。

(右写真/いの町紙の博物館収蔵)



竹ひごの先をくっつける「突き合わせ」は吉井源太が考案した絹糸を使う方法だと伝わっている。また、竹ひごをつなぐ際、先をL字に薄く切り取る職人技も見せてくださった。現在は消えた「鉤継ぎ」という技法である。

